

## 丸山眞男における思想史と政治理論

本報告では、主として、政治理論家（政治哲学者）としての丸山眞男について論じることになる。それは一見、本シンポジウムのテーマ「丸山思想史の方法」という問題設定からはずれるように思われるかもしれない。しかし、私見では、思想史家丸山眞男と政治理論家丸山眞男とは不可分であると考える。そうした立場から、このテーマを考えるというのが本報告の趣旨である。

### 一、思想史と政治理論（政治哲学）

そもそも、丸山にとって、思想史とは何だったのだろうか。「思想史の考え方について―類型・範囲・対象―」（二

九六一年初出、『忠誠と反逆』所収）の中で丸山は、思想史を①教義史・学説史型、② History of ideas 型、③時代精神を叙述する精神史型に区別した上で、丸山が考える「固有の意味での思想史」を②③に限っている。そして、「学問の専門分化の区別を突破する必要というものを痛切に感じる」ことよってのみこうしたタイプの思想史は成立するとしている。

こうした「専門分化」の相対化は「思想」なるものの内容規定においても同様に強調される。思想とは教義・学説といった高度の抽象性を持つものだけでなく、世界観や人生観、意見や態度、生活感情や実感に至るまで、広範な幅を含むものとして語られている。

川崎 修

こうした「思想史」観は、丸山が日本政治思想史研究を専門としたということと、ある意味では深く関係している。というのも、そこにおいては、西洋思想史のように、「政治」や「思想」そして「政治思想」についての、ある程度自明とされる共通了解を前提とするわけにはいかないからである。すなわち、問うべき政治や思想という対象それ自体が構成される必要があったはずである。

しかし、思想とは、政治とは何かという問いは、すでにそれ自体（単に歴史的ではなく）理論的・哲学的な問いをはらんでいる。だとすれば、「学問の専門分化の区別を突破する必要というものを痛切に感じる」ことよって生まれた「思想史」は、政治理論・哲学と分離不可能な関係にもともあつたのではないか（その限りで、本店・夜店論はあまり厳格には当てはまらないと思われる）。そういう意味では丸山をはじめから「政治理論家・政治哲学者」であつた。そしてそうした理論家としての作業は「思想史」を可能にする準備作業であるだけでなく、「思想史」という知の成果が結実する形態の一つでもあつたのではないか。

そこで問題となるのが同論文の中の「思想史」と「思想論」の区別である。丸山は思想史を「歴史的思想を素材として自分の哲学を展開する「思想論」と、一般的歴史叙述との、ちょうど中間に位するもの」と述べ、「再現芸術」

としての音楽における演奏家の役割に思想史家の仕事をたとえている。しかし、問題はその再現のありかたである。すなわち、歴史的文脈への徹底的な還元を重視する立場なのか、むしろ政治理論的な関心から思想史を読み解くことを重視するのかという問題はやはり残るのではないか。そして、問題史を重視する丸山思想史の真骨頂は後者の側面、いわば自由な上演、創造としての解釈にあるのではないか。その意味でも、やはり、丸山においては思想史と政治理論・哲学とが不可分な関係にあつたのではあるまいか。そこで、以下では、そのことをもつとも如実に示すと思われる例を見てみたい。

## 二、丸山眞男における「近代的個人」

ここでは、自我論（個人析出のさまざまなパターン——近代日本をケースとして——、一九六八年初出、『丸山眞男集第九巻』）、「忠誠と叛逆」（一九六〇年初出、『忠誠と叛逆』を素材に、丸山における思想史と政治哲学の交錯を考えたい）。

ところで、なぜ自我論に注目するのか。自我の問題をイデオロギーの問題と区別した形で論じるということは、丸山の政治理論の中でももつとも興味深い点の一つである。丸山自身は、日本においては、よく似たメンタリテイが正

反対の政治的立場にしばしば見られるといった現象に言及しているが、そのことは、必ずしも日本特有の問題ではないと思われる。自我の問題が政治的に決定的に重要になるのは、むしろ二〇世紀の（あるいはロマン主義以降の）政治思想の特色と言えるのではあるまいか。そしてこのことは、一九二〇・三〇年代思想家としての丸山という後述するテーマに深くかかわる。

しかし、当座の文脈においては、丸山の一連の自我論が、近代、近代化、近代的人間についての豊かにして複雑なイメージをはらんでいるということがより重要である。そこでは、伝統と近代の関係が単純な発展図式において語られるのではなく、豊かで逆説に富んだ関係をなすものとして語られる。

ところで、方法という観点からいうと、近代と伝統の関係は「批判」と「解釈」との関係になる。そこで以下、この二つの論点について順を追って見ていきたい。

### 1 近代的個人の成立

丸山によれば、「個人析出のさまざまなパターン」は「近代化のさまざまな局面での変化を個人の態度のレヴェルで図式化しようという試み」である。まず、丸山は、伝統的な共同体的紐帯からの個人の解放を「個人析出 individual-

ization」と呼び、自立化・民主化・私化・原子化という四つのパターンを提起している。しかし、この四パターンは単にそういうものがあるということを示す記述的なものというよりも、むしろ、そこでのテーマは、個人の析出がそのままいわゆる近代的な政治主体の成立を直ちに意味しないということ、言い換えれば、解放と自由の裂け目（アレント）、つまり共同体からの「解放」はそのままでは「自由」な個人の成立を意味しないということを強調することだといってよからう。そして、近代日本においては、共同体の解体と個人析出がもつばら私化と原子化としてあらわれ、自立化・民主化といった「結社形成的」タイプは例外的にしか実現しなかったと断じられるのである。その意味で、この論文では丸山の考える政治主体のイメージが極めてダイレクトに語られている。

しかし、日本近代には個人析出の別の可能性、結社形成型の可能性はなかったのか。「忠誠と反逆」はその可能性を探る試みとしても読むことができよう。「忠誠と反逆」では、そうした結社形成型の個人を生み出すエートスを、幕末維新の動乱の中で「思い出された」戦国武士・戦士としての武士の忠誠観の中にその可能性を見出している。しかし、こうしたエートスは福沢諭吉や自由民権運動の中にかろうじて受け継がれたものの、近代化の中で失われてい

つたとされる。

ここで注目すべきは、結社形成的な個人析出は、束縛からの解放による蜘蛛の糸のような自由ではなく、強烈なコミットメントを通じてなされるということが強調されている点である。いわば、宿命的な被縛の意識に基づく投企にこそこの個人の本质があると言うわけであり、その限りではまさに実存主義的な人間観だと言えよう(こうした自我像は、「自我を「位置ある」ものとして考えるべきだ」という近年の「共同体論」の主張とも、その限りでは重なるものがあることは興味深い)。

さらに、もう一つ注目すべきは、「近代的なもの」の「前近代的なもの」への依存という考え方である。すなわち、ある種の近代的な「主体」は、「封建的」なものに依拠して生まれ、その「封建的」なものが近代化によって解体されると逆にそうした近代的「主体」を可能にするエートス自体が失われてしまうというのである。当然、こうした洞察は、「伝統」と「近代」の関係を単純な発展段階論からより複雑なものにする。つまり「近代」の中での「伝統」の現前をより積極的に見ていくということにつながる。こうした「伝統」の再発見に基づく「近代市民社会」像の転換は、西洋史や西洋思想史研究における国制史研究や共和主義パラダイムでの「古代」・「中世」的なものの位置づけの変化を想起させる。

こうした近代に現前する過去を、単に克服されるべき病理としてではなく、さまざまに「近代的個人」を生み出す「エートス」の源として認めるならば、もはや近代は「複数の近代」でしかあり得ないはずであり、事実「個人析出のさまざまなパターン」はそれを示唆している。しかし、丸山はそうした複数の近代を等価のものとして受け入れたのではない。そして、後に述べるように、そこに、再びパラドキシカルに「古典近代の神話」とでも呼ぶべきものを呼び込むメカニズムがあつたのではないだろうか。

## 2 批判と解釈

ところで、方法の観点からいうと、近代と伝統との関係は、日本思想史においては、多分に「外在」的視点と「内在」的視点との関係に――すなわち、主として西洋思想史や西洋起源の政治学の理論に由来するモデルを尺度として日本思想史を論じるという見方と、日本思想史のテキストに内在するものをそれ自体として読み解くという見方の関係に――重なり合うことになる。ここでは、前者のような何らかの「モデル」を外から設定してそれを尺度(あるいは規範ないし規制的理念)として、そこからの距離や偏差・逸脱で思想史を論じる見方を「批判」と呼び、それに対して後者のように、その思想圏で「伝統」とされてきたテク



ストに内在する可能性を展開する形で思想史を論ずる見方を「解釈」と呼ぶことにしたい。

こうしてみると、一見「個人析出のさまざまなパターン」は批判型であり、「忠誠と反逆」は解釈型と言えそうである。また、たしかに、「思想史の考え方について」においては、こうした外在と内在との関係が一見対立的に論じられている。けれども、丸山においては、この両者は最終的には別物ではないのではないか。それは丸山が思想の「到達した結果」というものよりも、むしろその初発点、孕まれて来る時点におけるアンビヴァレントなもの、つまりどっちにいくかわからない可能性」（「思想史の考え方について」、『忠誠と反逆』三三三頁）に着目したこととかかわっている。すなわち、丸山にとつては、テクストに潜在しているが現実化は未だされていない可能性の奪回としての「解釈」こそが思想史の真骨頂だったのではないのか。

こうした「解釈」の作業の中では、「批判」は既存の伝統を異化することを通じて、この「解釈」を準備する。つまりその意味で「解釈」の一環となる。また「解釈」は既存の伝統の破壊である以上、既存の伝統の外に立つという意味において一つの「批判」でもある。それは伝統の再定義であり、破壊・解体的保存だと言えよう。

けれども、丸山においては、内在と外在の不可分性は、

思想の認識論だけでなく、その存在論にも及んでいる。すなわち、およそ思想というものの根源的な雑種性の認識である（それが文化接触への関心に結びつくことはいうまでもない）。

### 三、一九二〇・三〇年代思想家としての丸山眞男

最後に、先に示唆した、一九二〇・三〇年代思想家としての丸山眞男という問題、すなわち、丸山眞男と同時代の思想との共通性について、若干のコメントを述べておきたい。

#### 1 近代批判者としての丸山眞男

第一が、丸山における「近代批判」と「近代の擁護」の関係である。言うまでもなく、テクノロジーおよびそれと結びつけられた官僚制化と大衆社会化とは、一九二〇・三〇年代思想において、政治的立場の相違を超えて、必ずといってよいほど現れるテーマである（ウェーバーからシュミットまで、ヤスパースからハイデガー、アレントやシュトラウスまで）。いいかえれば、「近代批判」の共通のトピックと言えよう。そして、少なくとも戦後のある時期以降の丸山には、テクノロジー・官僚制化と大衆社会化への批判が明確に存在している。例えば、「政治権力の諸問題」（一九五七年初出、「増

補版『現代政治の思想と行動』所収)には次のように書かれている。

むしろ近代社会の技術的合理化にもとづく社会的必然として出てきた集中権力を、いかに大衆の福祉と自発的参与に結合させ、官僚化による社会的パイプの閉塞を防止するかに今後の問題がある。にもかかわらず、現代の権力集中から右のように種々な形態の病理現象が発生し、しかもその病理のうちには、社会体制の相違をこえて共通する危険性も少なくない。(傍点原文、四四四～四五頁)

さらに、ひるがえれば、官僚制化への批判はすでに「超国家主義の論理と心理」から「軍国支配者の精神型態」(ともに『増補版 現代政治の思想と行動』所収)に至る論考の主要テーマであるし、大衆社会の問題も、後知恵的に見れば、見出せないわけではない。そして、少なくともマッカーシズムを論じた「ファシズムの諸問題」(一九五二年初出、『増補版 現代政治の思想と行動』所収)においては、大衆社会状況を明確に念頭においてファシズムが語られることになる。こうして見るならば、丸山の現状認識は、近代批判者として通例はあつかわれる人々の見方と、相当程度近いものがあると言えよう。しかし、丸山の場合には、官僚制化と大衆社会化への批判が近代・近代化自体への丸ごとの批判

とはならず、「近代批判」と「近代の擁護」とが同時に遂行されるという点に、大きな特色があったのではなからうか。いわば、テクノロジ・官僚制化と大衆社会化に象徴される産業社会としての近代と民主化・自由化としての近代とが区別され、前者への批判が後者の擁護と平行してなされたと言えるのではないか。それを端的にうかがわせるのが「軍国支配者の精神型態」(一九四九年初出)の中でのマイネットケへの批判である。

F・マイネットケはかつて、機械文明の生み出した大衆の登場と軍事技術の発達によつて、本来政治の手段であるべき軍備機構がデモニツシユな力として自己運動を開始するようになったこと、他方大衆の動向を政治家がコントロールできなくなつたこと、を指摘し、十九世紀後半から明晰な「国家の必要」(Staatsnotwendigkeit)が模糊とした「国民の必要」(Volksnotwendigkeit)に取つて代られた旨を論じて、これを国家理性性の「危機」と呼んだ。ここでは彼は第一次大戦におけるドイツの例を念頭においているのであるが、果して彼の断定はそのように一般化できるのだろうか。少なくとも軍事機構のそうした政治をはなれての自己運動、乃至は国民の間の無責任な強硬論など、第一次戦争直前のドイツと今度の日本との間に見出される著

しい類似性は、両帝国が国家および社会体制においてともに権威的・階層的な構成を持ち、しかもそこで政治的指導者が揃って矮小であつたという事実と切り離しえないように思われるのである。(傍点原文、『増補 現代政治の思想と行動』一四一―五頁)

言い換えれば、近代が生み出した問題を文明の宿命と見ること拒み、あくまでも政治的な問題として丸山は見ようとしたのではあるまいか。だからこそ、丸山の場合には官僚制化と大衆社会化の近代への批判と、(それにもかかわらず)民主化と自由化の徹底を阻む前近代的なものへの批判としての近代の擁護とが併存することになったのである。

「近代批判」と「近代の擁護」とのこの同時性は、たしかに一面では後発国特有の悩みであるが、しかしそれだけではなく、むしろ他面ではポスト・モダンニティの問題でもある(言うまでもなくポスト・モダンニティの意識はヨーロッパ思想においては、そしてその影響のもと日本においても、一九二〇・三〇年代には明らかに存在した)。ポスト・モダン状況を前にして、近代的なるものの中身を選別し、近代を選択的に擁護するというシナリオは、今日においても、ハーバーマスの「未完のプロジェクトとしてのモデルネ」論や、ベックやギデンスの「再帰的近代化」論などにも見られるが、丸山の中にも、とりわけ「忠誠と反逆」や「個人析出のさまざまな

パターン」などには明白な形で、見ることができよう。もちろん、こうした近代の選択的擁護は可能なのかということ自体は大問題であるが、ここはそれを論じる場所ではない。ただ、ここで注目したいのは、この選択的擁護の試みが、近代についての特殊なイメージ、いわばモデルとしての「古典近代」のイメージを、批判されるべき近代(官僚制化と大衆社会化)の陰画として、作り出すことになったのではないかということである。

丸山のこうした「あるべき」近代社会のイメージは、たとえば、「開国」(一九五九年初出、『忠誠と反逆』所収)における、「明六社のような非政治的な目的をもった自主的結社が、まさにその立地から政治を含めた時代の重要な課題に対して、不断に批判して行く伝統が根付くところに、はじめて……非政治的領域から発する政治的発言という近代市民の日常的モラルが育って行くことが期待される」(傍点原文)という一節に端的に現れている(『忠誠と反逆』一九四頁)。それは「政治的なるもの」からの逃走」と「政治的なるもの」への「即自的な密着」(政治権力の諸問題、『増補版 現代政治の思想と行動』四四五頁)の否定によって特色づけられると言つてよい。これは「個人析出のさまざまなパターン」の類型で言えば、明らかに自立化や民主化といった「結社形成型」個人に対応している。丸山はそれをリースマンの

「内面志向型パースナリティ」と結びつけているが、ここに、こうした「本来の」近代社会とその墮落形態としての大衆社会という図式が見出しうることとなる。しかし、実は、この両者の関係は反対なのではないか。つまり「本来の」近代社会がまずあつてその墮落形態として大衆社会が考え出されたのではなく、大衆社会の経験がまずあつて、いわばそれを異質化し批判するために「本来の」近代社会が構想されたと見るべきではあるまいか。つまり、私化・アトム化こそが根源的経験であつて、自立化・民主化型の「結社形成型」個人によって担われる近代というのは、事実の記述と言うよりも、現実批判のためにその陰画として、「ユー・トピア」として構想されたというべきなのではあるまいか。

丸山による近代の擁護は、あくまでも近代についての特定の理念の擁護である。従つて、日本における現実の「近代化」や、さらには日本に限らず「近代」の、とりわけ「現代」の世界の現実が、この理念から逸脱していると考えられる限り、丸山の近代の擁護は、これらの現実への痛烈な批判となる。いや、むしろ、こうした日本の近代化や現代の世界の現実にたいする批判のためにこそ、近代の理念の擁護はなされたと言えるだろう。

## 2 「危機の思想家」としての丸山眞男

最後に、丸山眞男を「危機の思想家」としての側面から考えてみたい。丸山は、危機を好んでテーマとした思想家だと言えるだろう。初期の徂徠研究から、「忠誠と反逆」や「開国」、福沢や文化接触を扱った諸論考、そして一連の「古層」論に至るまで、一貫して、丸山は危機ないし転換期の思想家を、ないしは、その思想を危機あるいは転換期への応答として論じることが多かったのではないか。まして、政治学や時論的な諸論考においては言うまでもない。

このことは、かなりの程度までは丸山眞男その人が危機の時代を身をもつて生きた人であるということと不可分であろうし、あるいは、「限界状況」が政治的影響なるもの本質を顕にするというシュミットの政治観の影響を見ることもできるかもしれない。しかし、ここでは、むしろ、思想の条件としての危機という視角に注目したい。つまり、危機こそが新たな思想を生み出すのであつて、研究に値する思想は何らかの危機の表現であるとともに、思想史研究そのものも、自らの危機意識と不可分だという考え方である。

実は、「危機」や「限界状況」が人を思考へと駆り立てるといふ、思想についての危機ディスコースとも呼ぶべきものは、一九二〇・三〇年代思想に広く共有されている特色であるとともに、政治的・学問的立場の相違を超えて

二〇世紀思想全体をかなりの程度広範に支配していると思われる。それは、自明性からの離脱として思惟をとらえる実存哲学において典型的であるが、それだけでなく、対象の矛盾と理論活動の連関、つまり危機と批判の連関を説く「批判理論」や、ウォーリンのいう「エビック・セオリー」においても同様の構造が見られる。「マジナル・マン」や「亡命者」や「ノマド」といった表象はどれも、こうした「限界状況」の擬人化というべきであろう。そして、丸山の思想史と政治理論もまたこうした危機デイスコースを共有しているという意味において、そこにも丸山の二〇世紀思想家としての同時代性が現れていると言えよう。

しかし、近代批判にせよ、危機デイスコースにせよ、それらは実は、今日に至るまで、社会理論・社会科学をふくむ現代の思想状況に広範に浸透した時代精神とでもいうべきものであり、いまなお我々をも拘束している。そして、その精神の磁場を共有する限り、なお我々は、丸山眞男と  
の思想的同時代性の中にいるのである。

引用文献

- 『丸山眞男集』第九卷、岩波書店、一九九六年  
丸山眞男『増補版 現代政治の思想と行動』、未来社、一九六四年